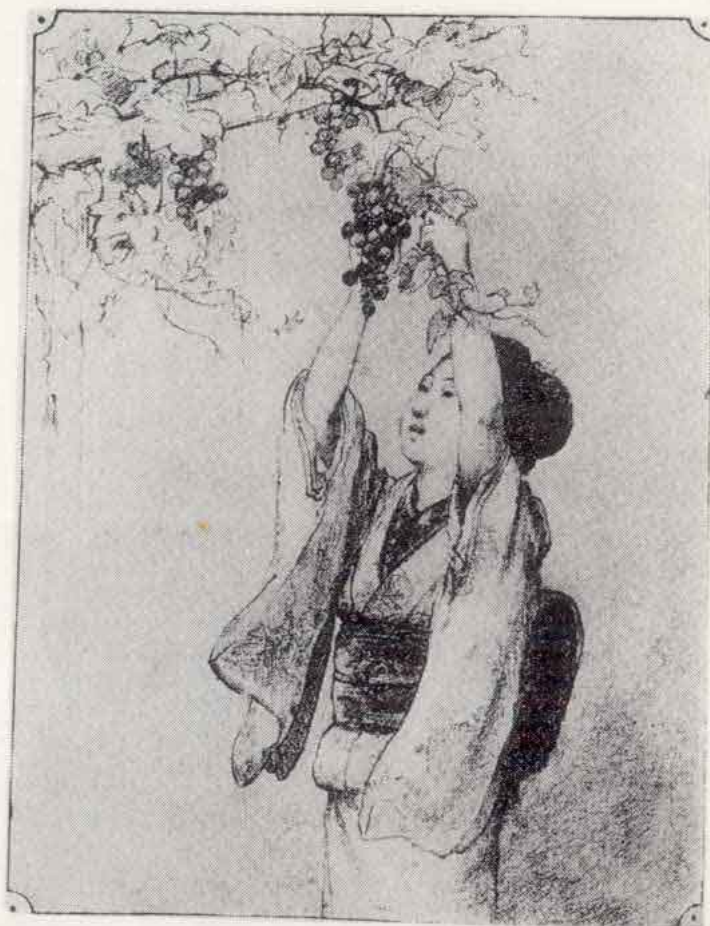


藤村詩抄

島崎藤村自選



日本の近代詩の出
発点となった島崎
藤村の詩は、近代
日本の自覚期とも
いうべき歴史的青
春と、詩人および
人間としての人生
の青春と、詩の文
芸ジャンルとして
の若さとが相まっ
て生み出された比

類のない青春文学である。『若菜集』『一葉船』『夏草』
『落梅集』などより自選。新たに各詩集初版本目次
と校異を付す。(解説＝吉田精一)(改版)



岩 波 文 庫

31-023-1

藤 村 詩 抄

島崎藤村自選



岩 波 書 店



第一詩集『若菜集』を出版した頃の著者
(明治30年11月)

自 序

『若菜集』、『二葉舟』、『夏草』、『落梅集』の
四巻をまとめて合本の詩集をつくりし時に

遂に、新しき詩歌しいかの時は来りぬ。

そはうつくしき曙あけぼののごとくなりき。あるものは古いにしえの預言者の如く叫び、あるものは

西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覚めて、民俗の言葉を飾れり。

伝説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照せり、過去の壮大と衰頽とを照せり。

新しきうたびとの群むれの多くは、ただ穆実ぼくじつなる青年なりき。その芸術は幼稚なりき、

不完全なりき、されどまた偽りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇くちびるにあ

ふれ、感激の涙はかれらの頬ほおをつたひしなり。こころみに思へ、清新横溢おういつなる思潮は

幾多の青年をして殆ど寝食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの声に和しぬ。

詩歌は静かなるところにて思ひ起したる感動なりとかや。げにわが歌ぞおぞき苦悶の告白なる。

なげきと、わづらひとは、わが歌に残りぬ。思へば、言ふぞよき。ためらはずして言ふぞよき。いささかなる活動に励まされてわれも身と心とを救ひしなり。

誰か旧き生涯に安んぜむとするものぞ。おのがじし新しきを開かんと思へるぞ、若き人々のつとめなる。生命は力なり。力は声なり。声は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。

われもこの新しきに入らんことを願ひて、多くの寂しく暗き月日を過しぬ。

芸術はわが願ひなり。されどわれは芸術を軽く見たりき。むしろわれは芸術を第二の人生と見たりき。また第二の自然とも見たりき。

ああ詩歌はわれにとりて自ら責むるの鞭にてありき。わが若き胸は溢れて、花も香もなき根無草四つの巻とはなれり。われは今、青春の記念として、かかるおもひでの

歌ぐさかきあつめ、友とする人々のまへに捧^{ささ}げむとはするなり。

明治三十七年の夏

藤
村

抄本を出すにつきて

二十五、六という青年時代が二度と自分の生涯には来ないように、最初の詩集も自分には二冊とはないものだ。その意味から、かつて私はこれらの詩を作った当時のことを原本の詩集のはじめに書きつけて置いたこともある。

明治二十九年の秋、私は仙台へ行つた。あの東北の古い静かな都会で私は一年ばかりを送つた。私の生涯はそこへ行つて初めて夜が明けたような気がした。私は仙台名影町の宿舎で書いた詩稿を毎月東京へ送つて、その以前から友人同志で出していた雑誌『文学界』に載せた。それを一冊に集めて、『若菜集』として公にしたのが、私の最初の詩集だ。私の文学生涯に取つての処女作とも言うべきものであつた。その頃の詩の世界は非常に狭い不自由なもので、自分等の思うような詩はまだまだ遠い先の方に待っているような気がしたが、ともかくも先蹤せんしようを離れよう、詩というものをもっともつと自分等の心に近づけようと試みた。黙しがちな私の口唇はほどけて来た。

心の宿の宮城野よ

乱れて熱き吾身には

日影も薄く草枯れて

荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき吾耳は

吹く北風を琴と聴き

悲しみ深き吾眼には

色無き石も花と見き

(草 枕)

私が一生の曙はこんな風にして開けて来た。

明治三十一年の春には私は東京の方に帰っていて、第二の集を出した。それは『二葉舟』とした詩文集で、その中には『若菜集』以後仙台で書いた「驚の歌」の外に、東京に帰ってからの詩数篇をも納めたものである。同じ年の夏、郷里の木曾へ旅して、

福島にある姉の家で『夏草』を書いた。私の第三の詩集だ。

私が信州小諸へ行つてあの山の上の町に落ちつくようになったのは、翌三十二年のことであつた。そこで私はまた詩作をはじめて、第四の詩集をつくつた。『落梅集』はその全部が千曲川ちくまがわの旅情ともいふべきものである。

私の青春の形見ともいふべき四巻の詩集は、明治二十九年より三十三年へかけ前後五年にわたつて、それぞれ別冊として公にしたものであつたが、三十七年の夏に『一葉舟』や『落梅集』から散文の部を省いて、合本一卷とした。私の詩集として世に流布しているものがそれである。

そういう私は今、岩波書店の主人から普及叢書の一冊として、この詩集の抄本をつくることを求められた。思うに、原本の詩集を縮め、僅かの省略を行い、ただ形を変えろというだけのことならば、抄本をつくることもそう骨は折れまい。しかしそれでは意味はすくない。長い月日の間には原本の詩集も幾度かの編み直しと改刷とを経たものであるが、更に私は編み方を変えて、この抄本をつくることにした。もつとも、詩集としての内容にそう変りのあるはずもないが、編み方に意を用いたなら、抄本は抄本として意味あるものとならうかと思う。

これを編むにつけても、もっと私は厳しく選ぶべきであつたかとも考える。今になつて見ると『若菜集』の中に、仙台時代以前に書いた二、三の古い詩を見つける。「君と遊ばむ」「流星」なぞがそれで、そういうものは省いたらとも考えたが、自分の出発の支度はそんなところにあつたことを思い、未熟なものも一概にそれを省き去る気になれなかつた。原本の詩集のうち、一番多くを省いたのは『夏草』の中からで、『若菜集』や『落梅集』からも長短数篇を省いた。題目等もこの抄本にはいくらか改めて置いたものもある。すべてはこれらの詩を書いた当時の自分の心持に近づけることを主にした。

思えば私が『若菜集』を出したのは、今から三十一年の前にもあたる。この古い落葉のような詩が今日まで読まれて来たということすら、私には意外である。頭髮既に白い私がこれを編むのは、自分の青年時代を編むようなものである。この抄本をつくるにつけても、今昔の感が深い。

昭和二年五月

あざぶ
麻布飯倉にて

著 者

目次

自序	五
抄本を出すにつきて	九

『若菜集』より

序のうた	一
草枕	二〇
二つの声	二六
松島瑞巖寺に遊びて	二六
春	
一 たれかおもはむ	二九
二 あけぼの	三〇

三 春は来ぬ	三〇
四 眠れる春よ	三三
五 うてや鼓	三三
明星	三五
潮音	三七
おえふ	三八
おきぬ	四一
おさよ	四三
おくめ	四四
おつた	四六
おきく	五一
酔歌	五四

哀歌……………	五
秋思……………	六〇
初恋……………	六二
狐のわざ……………	六三
髪を洗へば……………	六三
君がこゝろは……………	六四
傘のうち……………	六五
秋に隠れて……………	六六
知るや君……………	六七
秋風の歌……………	六八
雲のゆくへ……………	七〇
母を葬るのうた……………	七一
合唱……………	

一 暗香……………	七三
二 蓮花舟……………	七七
三 葡萄の樹のかげ……………	七九

四 高樓……………	八二
ゆふぐれしづかに……………	八六
月夜……………	八七
強敵……………	八八
別離……………	八九
望郷……………	九一
かもめ……………	九二
流星……………	九三
君と遊ばむ……………	九四
昼の夢……………	九五
四つの袖……………	九六
雞……………	九七
林の歌……………	一〇三

『一葉舟』より

鷺の歌……………	一二三
----------	-----

『夏草』より

白磁花瓶賦		二五
銀河		二五
きりぎりす		二七
春やいづこに		二九
小兎のうた		一三三
晩春の別離		一三五
うぐひす		一四〇
かりがね		一四三
野路の梅		一四四
門田にいでて		一四五
宝はあはれ砕けけり		一四七
新潮		一五〇

『落梅集』より

常盤樹		一五九
寂寥		一六三
千曲川旅情の歌		一六六
一		一六六
二		一六九
鼠をあはれむ		一七〇
労働雑詠		一七一
一朝		一七二
二昼		一七三
三暮		一七五
炉辺雑興		一七七
黄昏		一七九
枝うちかはす梅と梅		一八〇
めぐり逢ふ君やいくたび		一八三

あゝさなり君のごとくに	一八三
思より思をたどり	一八四
吾恋は河辺に生ひて	一八五
吾胸の底のこゝには	一八六
君こそは遠音に響く	一八八
こゝろをつなぐしろかねの	一九〇
罪なれば物のあはれを	一九〇
風よ静かにかの岸へ	一九二
椰子の実	一九三
浦島	一九四
舟路	一九五
鳥なき里	一九六
藪入	一九八

悪夢	二〇一
響りんく音りんく	二〇五
翼なければ	二〇七
罪人と名にも呼ばれむ	二〇八
胡蝶の夢	二一〇
落葉松の樹	二一二
ふと目はさめぬ	二二三
縫ひかへせ	二二六
解説	二二九
初版本目次および校異	二三五
(阿毛久芳)	二三五